

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長

子どもたちがこれからの主役となる平和な未来



「第1回
全国こども平和サミット」
かしや ふみあき
梶矢文昭氏の被爆体験講話

「第1回全国平和学習の集い」
活発なディスカッション



「第1回全国平和学習の集い」
笑顔あふれるエンディングフォト



「第1回全国平和学習の集い」
被爆体験に
耳を傾けるこどもたち



「第1回全国平和学習の集い」
松井広島市長
(平和首長会議会長)挨拶

「第1回全国こども平和サミット」
なかみつ いずみ
中満 泉国連事務次長
(軍縮担当上級代表)挨拶



「第1回全国
こども平和サミット」
フェニックスホールを
埋める参加者

目次

写真:子どもたちがこれからの主役となる平和な未来 ①
被爆80周年特別国際シンポジウムでヒロシマの位置付けや役割を議論しました ②
全国で動き出した若い世代への平和学習(ヒロシマ平和学習受入プログラム)
〜被爆地ヒロシマで、新しい自分を発見する心の体験をしませんか〜 ⑥

第1回平和学習を考える教師の集いが始まりました ⑦
国連大学におけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和写真ポスター展 ⑧



被爆80周年特別国際シンポジウムでヒロシマの位置付けや役割を議論しました

アメリカで広く被爆体験証言活動に従事された谷本清氏^{たにもときよし}は、「世界平和に永遠に貢献する方法が、われら自らの被爆体験から展開されなければならぬ。」という決意を表明されました。その一方で、「われわれは充分なエモーショナル・アピール（情動的訴え）は持っているものの、それを力強く打ち出す思想的理念を未だ持ち合わせていない。」という問題意識も示されています。

「人道イニシアティブ」は、まさに谷本氏が指摘された「思想的理念」に該当するものと考えられます。これは、国家安全保障や核抑止の議論を超えて、「核兵器が人類を滅ぼしかねないことを理由に、その廃絶の必然性を訴える」理念であり、180を超える国家からの是認を受け、2021年発効の核兵器禁止条約（TPNW）の最大の根拠となっています。

8月6日、ヒロシマの被爆体験に基づき、「人道イニシアティブ」の根拠となっている「壊滅的な人道的結末」に具体的な内実を与えるとともに、「人道イニシアティブ」を力強く支えていくことを広く発信するために、被爆者や世界の第一人者の方々にお集まりいただき、被爆80周年特別国際シンポジウムを開催しました。

当日は、平和記念式典に参列した各国駐日大使等（27か国40名）や、平和首長会議総会参加都市の首長、国際未来会議参加者等将来の活躍が期待される若い世代など約200名が参加しました。

【第1部 被爆者セッション】

第1部の被爆者セッションでは、まず、約20分間の映像「人類の破滅に内実を与える広島原爆体験」（被爆者4名^{たかくらあきこ たかはしあきひろ まつしげよしと あらいしゅんいちろう}（高蔵信子さん、高橋昭博さん、松重美人さん、新井俊一郎さん）が証言）を上映し、その後、ファンデルドゥース瑠璃^{るり}広島大学平和センター長・大学院人間社会科学研究科准教授による司会の下、被爆者の笠岡貞江さん、梶本淑子さん、河野キヨ美さんの3名が登壇し、合計7名の被爆者の証言を基に、核兵器がいかにして人類を壊滅に導くのか（核兵器使用の壊滅的な人道的結末）を検証しました。具体的な内容は以下のとおりです。

【熱線による被害】

「（爆心地付近で被爆し、直後に）建物の外に出ました。練兵場の方へ逃げようとしたのですが一面火の海でした。一面火の海です。銀行の裏のお寺もつぶれて燃えていました。」（高蔵氏）

「（避難）途中で多くの被爆者が列をなして逃げていくのに会いました。みんな両手が前にぶら下がっていて、服もぶら下がって、裸同然の人もありました。上半身にガラスの破片が突き刺さったり、皮膚が全部めくれてしまった男性や、眼球が飛び出して、全身血だらけの女性もありました。内臓が破裂した死体が転がっており、大火傷を負った母親と赤ん坊も道端に転がっていました。赤ん坊はギャーギャー泣いており、その泣き声が今も私の耳から離れません。馬は全身焼けて、首を水槽の中に突っ

込んで死んでいました。生き地獄という言葉がありますが、私たちが体験したあの被爆の状況が、まさに生き地獄であったと思います。」（高橋氏）



梶本淑子氏

「爆心地からお化けのような人たちがやってきました。両手を前に差し出して、焼けた皮は剥がれ、爪のところで止まって、ボロ布が垂れ下がっているように見えました。着ている服は吹き飛ばされたのか、焼かれたのか、丸裸です。顔は風船のようにふくれ、唇はめくれ、頭から体中から血を流して、ヨタヨタと人の後ろに付いて並んでくる姿は、お化けの行列のようでした。中学生の男の子が、自分のちぎれた腕を持って私の方にやって来て、目の前で死んでしまいました。その時の男の子の怖い、悲しそうな顔は、今も忘れることはありません。死んだ赤ちゃんを抱いたお母さんが何かわからないことを叫びながら、グルグル回っていました。気が狂っています。そんな無残な姿をした人がぞくぞくやって来ます。どれも人間の姿ではありませんでした。…街の中は死体でいっぱいでした。死体を踏まないように歩くんですが、皮をぶら下げたまま死んでいるので、仕方なくヌルヌルとした皮を踏んだことをはっきり覚えています。今もあの感触を忘れることはありません。道には、目が飛び出ている人、内臓の流れている人、肉片が転がっていたり、血の匂いやら、それはそれは地獄です。」（梶本氏）

「御幸橋の西詰めには警察の派出所があって、二人の警官が、火傷した人に食用油を塗っていました。そこにいる人のほとんどが、中学1年生、2年生の子どもたちなのです。彼らは建物疎開中に外でまともに熱線を受けたのです。体のいたるところ、背中、顔、肩、腕にボールのような火ぶくれが出来ていました。それが破れて、皮膚がボロ布のようぶら下がっていました。中には、裸足で火の上を走ったのでしょうか。足の裏まで焼けている子もいました。…なかなかシャッターをきれませんでした。20分ほど躊躇しましたが、ようやく1枚写して、4～5メートル近づいて2枚目を撮りました。今でもはっきり、あの地獄を覚えています。」（松重氏）



御幸橋西の写真

撮影者：松重 美人／
中国新聞社所有、
日本写真保存センター所蔵



「本当に、おとうさん？」

作者：小川 美波／
提供：広島平和記念資料館

「戸板に寝ている父の姿は、生きている人とは思えませんでした。顔は大きく腫れ上がって、着ているものは焼かれて体中が真っ黒に光っていました。声を聞いて初めて父だと分かりました。薬は何もなく、キュウリやジャガイモをすりおろして湿布代わりにしました。体が焼けて暑い

からすぐ乾きました。触ったらズルッと黒いところがむけて、下から赤みが出ました。表面だけでなく、内部まで火傷をしていました。…父は、行方不明の母と幼い私たちのことを心配しながら、8月8日の夜に息を引き取りました。」（笠岡氏）



笠岡貞江氏

逃げてくる被爆者の列
証言者：高橋 昭博／
公益財団法人広島平和文化センター制作、
広島平和記念資料館所蔵

【爆風による被害】

「(中学校の校庭で) 私たちはみんな、空を仰いで指差しながら、飛行機が通るのを眺めていました。その時です。ものすごい轟音がして、あたり一面真っ暗闇になりました。一寸先すら見えないという状況になったんです。その時私自身はすでに爆風で吹き飛ばされていました。…明るくなってから気づいたのですが、10メートルくらい後方に吹き飛ばされていました。友人たちもみんな吹き飛ばされて、校庭のあちこちに倒れていました。学校も近所の家も崩れて、遠くを見ても広島町の一切無くなったという感じでした。」(高橋氏)

「(潰れた建物の下からなんとか外に出ると) 広島町の街はべちゃんこに潰れていました。あれほど熱かった太陽もありません。暗くて、静かで、魚が腐ったような異様な匂いがしていました。(建物の下から) 出てきた友達が5、6人いましたが、髪は逆立ち、体中が真っ黒で、頭から血を流している者、腕の肉がちぎれて皮がぶら下がっている者、足の肉が取れて骨が見えている者。白いユニフォームは、血で染まっていました。みんな半狂乱でした。私の下敷きになっていた友達が一番ひどい怪我で、腕がブラブラ、皮一枚で繋がって、骨が見えて、それはかわいそうで見るのが怖いようでした。」(梶本氏)

「(8月6日は) 休んで家におりました。(原爆が投下された瞬間、) 窓の外が一面真っ赤に、いや、日の出の太陽にオレンジ色を混ぜたように綺麗な色でした。その瞬間です。ドーンと大きな音がしたと同時に、ガラスが割れて粉々になった破片が私の方に飛んできたんです。爆風のものすごい圧力で後ろに押されて、一瞬私は気を失いました。…じっとしているわけにもいかんから、外に出ました。火が付いた家が傾き、屋根瓦も壁土も散乱していました。」(笠岡氏)

【放射線による被害】

「私は8月いっぱい寝たきりで、食欲はなく、高熱が出て、歯茎から大量の出血がありました。腕の傷は化膿して、帰った時は蛆虫が湧いて、祖母が泣きながら割り箸で一つ一つ取ってくれました。…父は、爆心地から2.5キロ離れた自宅で被爆して、火傷も怪我もなかったのに、1年半後血を吐いて、間もなく亡くなりました。これは私を探すために、死体をひっくり返ししながら、3日間焼け野原を歩いたために、残留放射線を浴びたからだと思います。…私はその後、1999年、胃がんのため3分の2を摘出する手術を受けました。多くの友達も癌で亡くなっています。80年経った今でも新しい病気が出て、貧血や脳腫瘍で苦しんでいます。」(梶本氏)



新井俊一郎氏

「実は、私今6番目のがんを患っているんです。最初のがんを患ったのは1984年、私が50を過ぎた年代。この時最初の右の腎臓がんを患って、後いくつものがんを患って、生死の境を過ごしてきたんだけど、医師がおっしゃいました、新井さんは典型的な放射線を原因とする多発性がんの患者であります。今、再び腎臓がんを患っていますが、これはもう手の打ちようがない。そして、ステージはもちろん4。これが私の現在の宿命です。ということは、全て80年前の広島原爆の影響というのは、80年前に終わったのではなくて、現在も日本中にいる被爆者全員に、何がしかの私のような影響を及ぼしているということ、今の私は生き証人としてそれを証明することになるんだと。」(新井氏)

【市内中心部の惨状】

「矢賀駅のプラットホームに降りたとたん、動物を焼いた

ような、腐ったようなすごい悪臭が漂っていました。目や鼻を刺すようで息が詰まりそうでした。ようやく慣れて、目を開けてびっくりしました。昨日までそこにあった広島町の街が、沢山の家が、きれいに消えてないんです。あちこちでまだ煙がくすぶっていました。」(河野氏)

「市内に入ると、そこらじゅう死体がいっぱい転がっているんです。熱線に焼かれた人間の体は、茶褐色になって、大きく膨らんでいます。男か女かもわかりません。目玉が流れてゼリーのようになっていました。舌が三角で飛び出して、角になっています。内臓が破れて、卵焼きのような色をしています。脳みそも流れていました。私の一生で一番怖かった記憶です。」(河野氏)

「日本赤十字病院は、爆風で窓がみんな吹き飛んで、大変なことになっていました。あちこちから、血まみれの人が沢山運ばれてきます。そして、植え込みにも、玄関にも、廊下にも、寝かされているんです。並べられているんです。その人達が、『痛いよ、痛いよ、助けてください、水をください、お母さん。』と叫び、浴衣を着たお婆さんは、『私は年寄りだから、いっそのこと、はよ殺してください。』と。そのような叫びが、病院のコンクリートの壁に反響して、大きなうなり声になっていました。医師・看護婦さんも、沢山怪我をさ



日赤の花壇の上の遺体
作者:河野 キヨ美/
提供:広島平和記念資料館

れて、人手が足りません。…日赤の車寄せには、大きな丸い花壇がありました。いつもはそれが青々と茂っていたのに、その日は少年の死体が、丸太ん棒を積んだように、無造作に積み重ねてありました。あの辺で建物を壊す作業をしていて、集まって被爆したんだと思います。栄養が足りないの、中学1年生といっても、小学校5年生位の体格でした。あどけない顔をして、眠っているように見えました。きっと家に帰り、お母さんに会いたかったと思いますが、誰一人親御さんに看取られずに、ひとまとめにして焼かれてしまったようです。」(河野氏)

「御幸橋の上から川面を見ると、真っ白な死体が、上を向いたり下を向いたりして、沢山波に漂っていました。…爆心地近くで、1台の電車を何気なく見ると、中に黒いものがぶら下がっていました。何だろうかと思って見ると、吊革を持った腕が体からちぎれて、腕だけ残って炭のようになっているんです。人間の姿がないのにね。電車の中に、腕ばかりぶら下がっていたんです。…福屋デパートの前に兵隊さんたちがしゃがみ込んでいま



吊革を握ったままの腕
作者:河野 キヨ美/
提供:河野 キヨ美

した。この兵隊さんたちは、血も流していないし、洋服も汚れていません。不思議でしたが、後から考えると、放射線を浴びて、亡くなっていったんだと思います。」(河野氏)

最後に、瑠璃平和センター長が、「原爆により、一瞬のうちに街全体が崩壊し、そこに暮らしていた市民の多くが本当にひどい死を迎えました。広島町の街には死体がうずたかく積まれ、沢山の市民が、体を焼かれ、大けがをし、それでも家族を求めて自宅に帰ろうと、幽霊のように彷徨いまし

た。残念ながら帰宅後、多くの方が命を失いました。放射線は、直後の急性期障害に加え、80年後の今日に至るまで、白血病やがんなどにより、身体的・精神的痛みを与え続けています。これらは、全て現実起こったことです。…私たちが伝えたいことは、人間が今後も命を紡いでいくためには、このような結末があってはならないということです。人間と核兵器は相容れることはできません。私たちが何を失っても、一番失ってはいけないのは命であり、この命を守り続けるために今何ができるかを考えてほしいと思います。そして、被爆者のお話を思い出すときに、どうか自分のお顔を、自分の愛する人のお顔を重ねて、だから核兵器は非人道的なのだ、私は愛する人を守りたいから核兵器は許してはいけないと考えていただければ幸いです。」と締めくくった。

【第2部 パネル・ディスカッション】



中村桂子氏

第2部のパネル・ディスカッションでは、
中村桂子氏（長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）准教授）による司会の下、
中満 泉 国際連合事務次長（軍縮担当上級代表）、アレクサンダー・クメントオーストリア外務省軍縮・軍備管理・不拡散局長／

大使、メリッサ・パーク核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）事務局長、黒澤 満 大阪大学名誉教授、カシット・ピロム平和首長会議スペシャルアドバイザー／元タイ外務大臣、谷史郎当センター副理事長（平和首長会議副事務総長）が登壇し、「人道イニシアティブ」を今後もあらゆる核軍縮の議論の中心に据えるべき重要性、そのためにヒロシマが果たしていくべき役割等について議論を行っていただきました。

冒頭、クメント大使から、次のような問題提起がありました。

「人道イニシアティブの本質は、これまでのようなきれいごとの抽象的な外交の議論から、核兵器が一旦使用されたらどうなるのかという現実的・具体的な内容に着目するよう、観点を变えることにあります。核兵器の影響は地球上のあらゆる人間・生命に及ぶため、一国の安全保障の観点からしか見ないのは馬鹿げているのであって、人類全体にとってどういう意味があるのかという、地球の安全保障的な見方をしなければならないということです。」

「そのための議論の内容として一番いいのは、科学的エビデンスの研究であり、また、被爆者の証言などの人間の経験です。それによって、人類にとっての正当な懸念を示すことができるからです。そして、科学的な研究は学術的で抽象的なものになるおそれがあることを考えると、科学・研究は、被爆者の本物の経験に基づくストーリーがあって初めて機能すると思います。」

「平和が訪れるのを待つほど、私たちには余裕はありません。今こそ前進していかなければなりません。核兵器の問題を変えていくためには、議論の進め方も変えていく必要があります。すなわち、単に安全保障の専門家間の議論ではなく、より広く、国際的に、また、市民社会を含め、社会全体として議論をしていかなければなりません。核兵器は人類に、非常に大きく、また幅広い影響を及ぼすからです。これに対し、核兵器国は、安全保障の専門家の議論にとどめたいと考えています。このような社会全体の幅広い議論を



ファンデルドウス
瑠璃氏

戦略的に引き起こしていくことが、核兵器国に強い影響を与える最も確かな方法だと思います。」

「核兵器を本当に知るといことは、使用された場合の壊滅性を知ることの意味します。私も、『この壊滅的な結末を深く知れば知るほど、核廃絶の必然性がより明確になる。』と強く思います。人間として向き合いたくないことではありますが、これは核兵器を考えるに当たって必ず認識しなければならない事実です。」

「私は平和首長会議の支持者です。様々なプログラムを通じて市民意識の向上を図るとともに、市民レベルから、国の政策に影響を与えていっていただきたいと思います。特に、核兵器の壊滅性への認識を市民レベルで広めていくという平和首長会議の戦略は大変意義深いと思います。…そのような平和構築の取組を進める、広島市および平和首長会議のこれまでの、そして今後の役割に敬意を表したいと思います。」

続いて、谷副理事長が、「人道イニシアティブ」を支えるためにヒロシマが果たすべき役割について、次の4つの観点から説明し、パネル参加者の意見を求めました。



谷史郎氏

1 「人道イニシアティブ」の理念に内実を付与

- ・第一部の被爆者セッションでお示したとおり、核兵器使用の「壊滅的な人道的結末」の具体的な内容を、被爆地の経験に基づき、伝えることである。この壊滅性についての理解が深まれば深まるほど、核兵器廃絶の必然性への確信は高まるものと考え。
- ・2026年4月、資料館で非人道性・壊滅性に関する新展示を開始する。また、イメージ映像のウェブ展開や、海外原爆・平和展の強化を図る。

2 平和を愛する諸都市・市民との連帯

- ・市民の命を守る使命を有する都市は、必然的に平和を希求する存在となりうる。戦争が起これば被害を受けるのは都市であり、市民であるし、その被害を記憶し、平和への願いを承継していくのも都市である。
- ・国内外の多くの都市は、平和を象徴する都市ヒロシマの活動に共感し、ともに連帯して平和を求めていく意志を示している。
- ・このような中、広島市長が会長を務める平和首長会議は、166か国・地域の約8,500都市が加盟する世界最大規模の自治体平和ネットワークとなっている。
- ・国家間の疑心暗鬼が強い今こそ、国家主義を乗り越えて、人間を中心に据える「人道イニシアティブ」の考え方を、国際社会の共通基盤としていかなければならない。平和を愛する諸都市（平和首長会議）は、市民本位の立場に立って、この基盤づくりの努力をボトムアップで行っていかなければならない。

3 若い世代への平和学習の拠点

- ・ヒロシマは、資料館の展示物や原爆ドームなどの保存に努めてきた。「原爆投下のリアリティ」を感じ取ることは、平和を大切にする意識の獲得につながり、平和学習の極めて重要な出発点となるため、ヒロシマは、今後とも若い世代への平和学習の拠点としての役割を果たす考えである。
- ・その中で、核兵器の非人道性・壊滅性への理解を広く求めていく。
- ・このような文脈の中、2028年4月、資料館で平和学習のための新展示を予定している。

4 「平和を願うヒロシマの心」の伝達

- ・被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせたくない」という思いは、深い悲しみや憎しみを乗り越えて、専ら利他主義、寛容の精神に立って、平和を追求する立場を示めている。ヒロシマの平和活動の原点となっている考え方である。
- ・これは、犠牲者の死に意味を与えるという点で、人間の尊厳の回復を示すものであり、人間の安全保障にもつながる。
- ・ヒロシマは、世界平和の礎として、また、「人道イニシアティブ」の基盤として、この精神を広めていきたいと考えている。



中満泉氏

この4点に関し、中満事務次長からは、以下の発言がありました。「国連は、『人道イニシアティブ』のアプローチを、とても大切に考えています。2010年位から『人道イニシアティブ』が提唱され、いくつかの国際会議を経て、TPNWにつながりました。その課程で、『人道イニシアティブ』は3つの貢献を果たしました。第1に、核軍縮の議論の枠組みを変えたということです。これまで国家を中心とした安全保障の議論でしたが、この非人道的兵器が人類にもたらす影響という、人間が議論の中心となってきました。第2に、エビデンス・ベースの、人に対する影響が中心のテーマとなりました。このデータに基づく議論は核軍縮の議論に大きな影響を与えましたし、これからさらに発展していくと思います。第3に、核兵器が、単に核保有国の問題ではなく、グローバルに影響を及ぼすことを誰もが理解できるようになったことです。人類の生存に関わる影響があるということをです。特に地政学的な対立が高まっている今、人類への危険という認識は非常に重要なものとなります。」

「『人道イニシアティブ』は、TPNWはもとより、国連総会にも関わってきます。その意味で、私たち皆が『人道イニシアティブ』を育んでいかなければならないと思います。これは私たちの助けになるからです。」

「国連事務総長は、平和首長会議代表団がニューヨークを訪問するたびに必ず面会をしています。都市は市民と近い関係にあり、様々な面で直接的な影響があります。このため、都市は、共存や寛容の精神、暴力による人類に対しての影響を中心に据えて考えます。だからこそ、都市の役割は非常に重要です。国連は、国家による組織で、市民社会や地方自治体の役割を軽く見てしまう傾向にありますが、やはり都市は極めて重要な平和の推進役です。私たちには市民社会の貢献が必要です。政府間協議においても、そのような様々な視点を盛り込むことは、大きな貢献になると思います。」

「平和首長会議、広島・長崎は、既に非常に重要な国連のパートナーです。今後も、教育の推進などの面で連携を図っていききたいと思います。また、被爆者の証言も、国連の討議の中で、大きな役割を果たしています。」

「『ヒロシマの心』は唯一無二のもので、他にはない貢献ができています。資料館を訪れる外国人は、ヒロシマが復讐の道を選ぶのではなく、平和の推進を重視していることに感銘を受けています。『ヒロシマの心』とは、他の人に同じ苦しみを味わわせないという、寛容の精神、より平和な道を選ぶ姿勢であり、実体験に根差した、国際社会に対する大変重要なメッセージです。平和や安定は、恐怖や、支配、力のもとでは築けません。持続可能な安全保障は、様々

な違いを乗り越え、相互理解を育み、皆で取り組むことにより達成されます。違いに拘るのではなく、人間に共通する普遍的価値に注目すること、それが『ヒロシマの心』だと思います。そして、それが世界に感銘を及ぼしています。広島と長崎は、共感と対話、人と人との繋がりから平和を構築できるという、力強いメッセージを世界に送り続けています。」



パーク事務局長からは、以下の発言がありました。

「被爆者の方々は核兵器の現実を世界に知らせるため、幾度となく自らの体験を語ってこられています。彼らこそが真の核兵器専門家であり、核兵器禁止条約は、まさに彼らの努力の成果でもあります。その活動が認められ、昨年日本被団協はノーベル平和賞を受賞されました。」

「ICANは広島・長崎と協力して、核兵器が子供たちに与える特異かつ過大な被害について世界に伝える活動を行ってきました。彼らの経験を共有することで、核兵器がもたらす脅威に世界中の人々が気づき、誰もが同じ悪夢をたどらないようにしたいと願っています。」

ピロム平和首長会議スペシャルアドバイザーからは、以下の発言がありました。

「広島・長崎のリーダーシップの下、都市が協力して取り組んでいます。これは是非続けていってください。核兵器が一般の市民への脅威にならないように、人のレベル、また地域社会のレベルで取り組むべきです。また、国連と協力しながら取組を進めることもできると思います。そうすれば、核兵器が危険であるという認識が若い人たちに浸透していくと思います。」



カシット・ピロム氏



黒澤満氏

黒澤名誉教授からは、以下の発言がありました。

「若い人たちは、皆広島・長崎で平和学習をすべきだと思います。その際、資料館は、非常に重要な貢献をしてくれます。大学でも、平和学習を行うべきで、核廃絶を目指した研究も必要です。」「今、メイン・アクターは国家で、特に核保有国は大きな力を持っています。これに対し、国連、NGO、そして都市といったプレイヤーがもっと力をつけて、声を上げていくことが必要だと思います。国というのはただ力を求めるものであり、私たちは安全と安定を求めています。その根底にあるのは人道主義です。このような考えを、長期的に、国連と、国以外の主体とが活発に動いて、前進させていく必要があります。」

最後に、谷副理事長から、以上の貴重な議論を踏まえて、国際社会と連携しながら、ヒロシマの取組をさらに積極的に進めていきたい旨発言し、パネル・ディスカッションは終結しました。

(参考動画)

シンポジウムの模様は、(公財)広島平和文化センターのYouTube チャンネルから御覧いただけます。



(平和文化企画課)

全国で動き出した若い世代への平和学習(ヒロシマ平和学習受入プログラム) ～被爆地ヒロシマで、新しい自分を発見する心の体験をしませんか～

8月6日の広島平和記念式典に全国から派遣された小中高生等に対し、深く平和を学習する機会を提供する、「ヒロシマ平和学習受入プログラム」(「第1回全国平和学習の集い」及び「第1回全国こども平和サミット」)を実施しました。112自治体(26都道府県)のこどもたち1,319人、引率者489人、受入側等546人、総計2,354人の参加により、大規模かつ充実した学びの場となり、若い世代への平和学習が全国規模で動き出す第一歩となりました。

また、参加自治体の3分の2が、こどもたちの発信等により、当該自治体での平和文化が大いに向上したと報告しています。

令和8年度も、平和を愛する沢山の自治体のご参加をお待ちしています。

第1回全国平和学習の集い

～Peace for Smile, Smile for Peace～

8月5日から7日までの3日間、72自治体(22都道府県)のこどもたち828人、引率者285人、被爆の実相やファシリテート技法の研修を積んだユース・ピース・ボランティア333人(15自治体(5県))、総計1,446人が、市内7会場に分かれて平和学習に取り組みました。

第1部の「平和学習会」では、まず、ユース・ピース・ボランティアから原爆被害の概要を説明しました。続く被爆体験講話は、会場ごとに、才木幹夫さん、梶本淑子さん、笠岡貞江さん、八幡照子さん、河野キヨ美さん、岸田弘子さん、内藤慎吾さんの7名のお話の後、参加者からの様々な質問に丁寧に答えていただきました。



「第1回全国平和学習の集い」
グループ・ディスカッション

第2部の「グループ・ディスカッション」では、「①あなたの地元では、第二次世界大戦中にどのような被害を受けましたか。」「②今、平和でない状態とはどのようなことがありますか。また、それはどうしたら解決できると思いますか。」、という2つのテーマについて、参加者とユース・ピース・ボランティアが、時間をかけてグループ・ディスカッションを行いました。

アンケートでは、この集いの意義が、次のように浮かび上がっています。

<参加したこどもたち>

- ・貴重な体験が詰まったプログラムで、初めて本当の意味で平和を願うということを理解した。新しい発見、学びの多い、有意義な時間であった。
- ・これまで経験したことがない、とてもいい機会であり、自分の成長につながった。平和な世界を実現させる一人になりたい。
- ・未来の平和をつくるのは私たちなんだということを再認識させられた。また参加したいし、これからも続けてほしい。
- ・年々少なくなっている被爆者の言葉の重み、心からの平和への訴え・叫びが、自分の想像を超えた内容として、これ

までにないくらい強く伝わってきた。被爆者家族の悲劇などを聞き、当たり前がどれだけ幸せかを実感した。質問時間に被爆者が疑問に答えてくださり、交流できたのもよかった。

- ・グループ・ディスカッションでは、自分では気付かない多様な意見に接し、考えを深め、広げることができた。幸せとは何かを考えさせられた。
- ・話し合うことなど自分たちにはできないと思っていたので、できることが分かり本当にいい機会だった。初対面で緊張したが、ユース・ピース・ボランティアが優しく、丁寧に進行してくれ、フレンドリーに、楽しく話し合うことができた。たくさんの仲間ができたし、心強かった。
- ・全国に平和を願っている人が多くいることを知った。目指しているところは同じ、心は一つだと実感した。差別をしないなど、小さなことから解決していけば、平和に近づくのではないかと思う。

<引率者>

- ・全国各地のこどもが集まって、平和について考えることそのものが、価値があり、未来につながる取組だと考える。引率者にとっても、広島ユース・ピース・ボランティアの意識の高さなどから多くのことを学び、有意義であった。
- ・全国の自治体を対象とした大変良い取組で、その原動力は広島市側スタッフの「熱量」ではないかと感じた。今後も続けてほしい。
- ・全国の知らないこども同士をうまくグループ分けしたディスカッションがとても良い。同世代と主体的に話し合い、発表する場は珍しく、貴重で、主体的な学習につながる。若者同士、声を聴き、表情を見ながら討議し、その熱量を肌で感じられたことが素晴らしい。
- ・参加後、こどもたちが、目をキラキラさせながら、学んだこと、感じたことを、お互いしゃべり合っていた。自分たちができることから始めようといった。「本物」に触れることができ、大変良い刺激を受けていた。
- ・広島市の補助金支給により、厳しい財政事情でも、遠方からの参加のハードルが下がり、予算化しやすくなった。また、事業縮小も考えられる中、継続する理由になった。
- ・あらかじめ、事後の講演イベントでの発信がセットとなっているため、参加するこどもたちのモチベーションは高く、地元への波及が期待できる。

<ユース・ピース・ボランティア>

- ・日本全国に平和を伝えることができ、コミュニケーションも上手くなり、各地の友達もできたので、すごく良いボランティアだった。平和についての自分の視野が大きく変わり、活動の幅が広がった。素晴らしい夏になった。
- ・戦後80年を迎えた今年、戦争の記憶を風化させないという強い意志を仲間と共に持つことができた。同じ気持ちの仲間と議論できた。協力する大切さや、一人ひとりの小さな行動が大きな力になることを実感した。
- ・どの事前研修も楽しく、次第に平和への思いや、本番へのやる気も高まった。自分が思いつかなかった考えや知識も、たくさん得ることができた。事前研修で自信がついた。本番のグループ討議ではよい議論を展開でき、充実したもの

となったので、満足感を感じた。

- ・自分が変わる良い経験となった。初めはできなかった、自分から話しかけることや話題を提供することが本番ではできて、自分の成長に驚いた。様々な視点から考える大切さ、知らない人ばかりの環境で雰囲気良くすることなど、学校では学べないことをたくさん勉強でき、今後の学校生活や日常でも役立つ場面が多いと思った。
- ・他地域の参加者が、事前にしっかり調べ、分かりやすく発表してくれたので、全国各地にもそれぞれ戦争による被害があったことを学ぶことができた。
- ・今後も参加したいし、次は、海外の若い世代とのディスカッションやガイドなどの平和活動も行ってみたい。

第1回全国こども平和サミット

～ Peace for Smile, Smile for Peace ～

8月6日の式典終了後、63自治体（19都道府県）のこどもたち708人、引率者281人、広島市側等213人、総計1,202人が参加し、国際会議場フェニックスホールで開催しました。

冒頭、中満 泉 国連事務次長（軍縮担当上級代表）は、「平和とは何か」、「どうすれば平和を創ることができるのか」、「自分は何ができるのか」の3点について考えてほしいと挨拶されました。続いて、広島特別支援学校高等部の生徒が、平和へのメッセージを画面に投影しながら、「いつまでも」の合唱を行い、サミットがスタートしました。

第1部の「被爆体験を学ぼう」では、バーチャル・リアリティによる「ヒロシマ『被爆／復興』疑似体験映像」を視聴した後、梶矢文昭さんが被爆体験講話・質疑を行いました。続いて、朗読ボランティアの朗読を聴いた後、参加者全員で、原爆詩「げんしばくだん」を声に出して読み上げました。

第2部の「平和のバトンをつないでいこう（平和への取組発表）」では、



「第1回こども平和サミット」発表の様子

北広島市子ども大使（北海道）、市原市平和大使（千葉県）、石垣市平和大使（沖縄県）の活動報告や、岡谷市（長野県）のいじめをなくす取組、広島市や長崎市の生徒による平和活動や地域貢献への取組など8

団体が発表を行い、平和への思いを共有しました。

アンケートでは、サミットの意義が、次のように浮かび上がっています。

＜参加したこどもたち＞

- ・心に残るプログラムで、これからの人生に大きな影響を与えてくれた。私たちの行動で平和な社会が続いていくのではないと思った。私たちが、これからどうすべきか、何ができるのかを考えていく必要があると感じた。
- ・参加できて本当に良かった。VR視聴や被爆体験講話などで原爆や戦争に対する考えが深まり、また、現地でしか感じられない雰囲気を感じることができ、とても素晴らしく貴重な時間となった。心にとっても響いた。
- ・被爆者や朗読者、こどもたちなど、様々な立場の方から、

それぞれの視点での話を聞くことができ、とても有意義だった。全国各地のこどもたちと意見を共有できてよかった。

- ・合唱は、聴いていて気持ちの良いものだった。
- ・被爆者のお話で、本当に「ああこういうことが広島で起こったんだな。」とよく分かった。本当に大変な思いをたくさんされたということが分かった。一つ一つの話が心に残った。当たり前前の生活を感謝できるようになった。
- ・朗読者の言葉は力強く感じ、また、自分たちが声に出すと、感情がこもって、書いた人の気持ちになれた。実際の情景が浮かび、胸に響いた。平和についてもっと強く伝えていかなければならないと感じた。
- ・それぞれの地域での「平和」に向けた取組が聞け、自分の地域と比べてみることができた。同年代の意見を聞くいい機会だし、こんなにも平和に対して積極的だということに衝撃を覚えた。私たちもやれたらいいなと思った。

＜引率者＞

- ・名称が新しくなり初めてのサミットだったが、すごくよかった。柔らかな心を持った若い世代と、平和の素晴らしさを一緒に考える場になればと思う。被爆の事実を忘れることなく、しっかりと受け止めつつ、現在や未来に向けて何ができるのか、どう行動すればよいのか、そう問いかけてくるような内容だった。こういった活動が広がってほしい。
- ・8月6日前後の被爆地広島は、長崎を除いて、絶対に体験できない熱さなので、大変勉強にもなり、刺激的である。このイベントを続けることに平和的意義があると思う。
- ・引率者も戦争と平和についていろいろと考える良い学びの機会となった。こどもたちの真剣なまなざしと、「今の平和を守るにはどうしたらいいか。」という率直な投げかけは、大人にも多くの気づきを与えてくれた。

（参考動画）



ダイジェスト版



通常版



ユース・ピース・ボランティア版

（平和学習課）

第1回平和学習を考える教師の集いが始まりました

広島修学旅行に関する栗原 真子 さんの「始めに教師ありき。教師が人間的感動を持って生徒にぶつかって行くなれば、生徒たちも感動の火花をもって答えるのである。」という言葉を糧に、8月21・22日の2日間開催しました。

東京都、茨城県、千葉県から21名の校長・担当教師、広島市から平和学習に携わる11名の教師・広島市教育委員会指導主事、さらに広島大学教育学部教員が参加し、平和学習に関するグループ・ディスカッションを行うとともに、広島での様々な平



関東と広島の教師によるグループ・ディスカッション

和学習プログラムを体験しました。

1日目の冒頭、被爆体験講話では、元小学校校長の梶矢文昭さんの証言を聞き、参加者からは、「ひとつひとつの言葉が重く感じた。」「その当時を知る人にしか、語れない凄まじさを感じた。」との声がありました。

平和学習の事例発表では、中央区立 佃 中学校から「広島市立己斐中学校とのオンラインと現地で実施した学校間交流」、港区立御成門小・中学校から「広島に修学旅行に行くことを決めるまでのプロセス」の発表がありました。

グループ・ディスカッションでは、広島修学旅行に関する2つのテーマ〈①広島での現地学習の質を高めるための視点と取組（広島での現地学習はどうあるべきか）②事前・事後学習を広島での現地学習にどうつなげるか、またそれを学校全体の活動にどう発展させるか〉について、関東の教師と広島の教師が4人程度のグループに分かれて、活発に議論を交わしました。あるグループでは、平和について自分事として考えさせるために、「自分の生き方と結びつくようにこども自身が課題をつくるようにしている。」（関東の教師）、「いきなり平和について考えましょうではなく、カープなど興味のあるところから調べてみたら80年前のヒロシマに辿り着いた、となるようにしている。」（広島の教師）といった実践事例の意見交換がありました。また別のグループでは、「なぜ広島に修学旅行に行くのか」という広島の教師の問いから、「今も世界に存在し、使用される可能性のある核兵器の被害を受けた場所だから」、「遺産が街中に目に見える形で残っている場所だから」といった意見が出ていました。その後の全体発表では、広島市が作成した「ひろしま平和ノート」について、「（関東でも）ぜひ教材として使いたい。」と好評でした。多くの参加者から、「もっと話をする時間が欲しかった。」という声があがっていました。

2日目は、平和記念資料館や本川小学校平和資料館の見学・慰霊碑巡り、朗読体験といった被爆の実相を学ぶプログラムが中心でした。その活動の中で、中学生の犠牲者が多かった理由や、本川小学校でたった一人生き残った児童の話などに、真剣に耳を傾ける参加者の姿が見られました。また、「ボランティアの方々の思いも同時に受け取れた。それぞれの方が、学び、考え、そして吟味して伝えているのを目の当たりにし、とても感動した。」との声がありました。

令和8年度は、神奈川県内の公立中学校（414校）を対象を拡大し、内容もさらに充実したいと思います。経費は広島平和文化センターが負担しますので、平和学習に興味をお持ちの学校・教師の皆さんの参加を是非お待ちしております。

《参加者の感想》

・充実した、学びの多い、素敵な研修会だった。多感な時期に広島や長崎を訪れることは必要だと改めて感じた。また、中学校の3年間を通して、少しずつ平和学習を積み重



関東からの参加者と奥原球喜元本川小学校校長（左端）及びセンター職員

ねることの大切さを学んだ。このような意義や取組を、広島からもっと発信してほしい。

- ・広島の学校では平和教育が当たり前に根付いていることや、教師の意識の高さ、熱量を感じた。特に若い教師が強い気持ちを持って平和学習を推進している姿を見ることができたのは、大きな収穫だった。広島大学教育学部での平和学習の理論等についても、さらに学んでみたい。
- ・ピース・ボランティアの話はとても分かりやすかった。修学旅行でも取り入れたい。また、特に学校間交流も印象に残った。モニター校制度についてもさらに知りたい。
- ・無知な自分が参加して良いか不安に思っていたが、広島の方々にとても温かく迎え入れていただいた。そして熱量が高い先生方と触れ合う中で、意欲だけでなく知識も深まり、より一層広島修学旅行を計画し、実行していこうと思う気持ちが強くなった。
- ・素晴らしい内容で、今後さらに参加者が多くなる気がする。同僚教師に（教師の集いを）勧めていくことはもちろん、これから生きる生徒たちに広島や平和について語り継いでいくためにも、関東の学校による広島修学旅行が少しでも増えたらと考える。



「被爆地ヒロシマへ『関東エリア』の教師を招き修学旅行の『平和学習』在り方など議論」(TSSニュース)

(平和学習課)

国連大学におけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和写真ポスター展

被爆80周年を記念し、7月11日～8月17日、国際連合大学（東京都渋谷区）でヒロシマ・ナガサキ原爆・平和写真ポスター展を開催し、約1,200人が来場しました。

オープニングセレモニーには、松井一實広島市長、鈴木史朗長崎市長、チリツィ・マルワラ国際連合大学学長、岸田文雄前首相、各国の駐日大使らが出席し、10歳の時に長崎市中で被爆した三瀬清一朗さんの講話に耳を傾けました。



国連大学におけるオープニングセレモニー
(写真提供:国連大学)

会場には原爆写真ポスターや、佐々木禎子さんに関するポスターを展示。様々な年代・国籍の方が訪れ、被爆体験伝承者らが展示解説しました。また、VRゴーグルや、AI被爆体験証言応答装置の体験も行いました。

来場者からは、「東京で原爆展をやる意義は大きい。」「写真やポスター、文章も必要だが、VRでよりリアルに、自分の体験として感じる事ができた。」などの感想が寄せられています。

また、平和首長会議と国際連合大学が連携体制を構築する良い機会となりました。

(平和文化企画課)